少年の日の思い出 (5)

(ヤママユガをつぶしてしまった「ぼく」は、母に促され、エーミールのもとを訪れました。)

彼は出てきて、すぐに、だれかがヤママユガを台無しにしてしまった。悪いやつがやったのか、あるいはネコがやったのかわからない、と語った。ぼくはそのチョウを見せてくれと頼んだ。ふたりは上にあがっていった。彼はロウソクをつけた。ぼくは台無しになったチョウが展翅板の上にのっているのを見た。エーミールがそれをつくろうために努力したあとが認められた。こわれた羽は丹念にひろげられ、ぬれた吸取り紙の上におかれてあった。しかしそれはなおすよしもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それはぼくがやったのだと言い、詳しく話し、説明しようとこころみた。

　すると、エーミールは激したり、ぼくをどなりつけたりなどはしないで、低く、ちえっと舌を鳴らし、しばらくじっとぼくを見つめていたが、それから『そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな』と言った。

　ぼくは彼にぼくのおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡にかまえ、依然ぼくをただけいべつ的に見つめていたので、ぼくは自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は、『結構だよ。ぼくは君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、きょうまた、君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ』と言った。

　その瞬間、ぼくはすんでのところであいつののどぶえに飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。ぼくは悪漢だということにきまってしまい、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義をたてに、あなどるように、ぼくの前に立っていた。彼はののしりさえしなかった。ただぼくをながめて、けいべつしていた。

　そのときはじめてぼくは、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。ぼくは立ち去った。母が根ほり葉ほり聞こうとしないで、ぼくにキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。ぼくは、床にはいり、と言われた。ぼくにとってはもう遅い時刻だった。だが、その前にぼくは、そっと食堂に行って、大きなトビ色の厚紙の箱を取って来、それを寝台の上にのせ、やみの中で開いた。そしてチョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなにおしつぶしてしまった」

(高橋健二訳『ヘッセ全集2　車輪の下』新潮社　所収
「少年の日の思い出」による)

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線部「もうどうにもしようがなかった」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア エーミールのヤママユガを台無しにしてしまい、直しようがなかったということ。

イ エーミールにヤママユガを盗んだことが知られてしまい、隠しようがなかったということ。

ウ エーミールにチョウの収集の受け取りを断られてしまい、うめ合わせのしようがなかったということ。

エ エーミールが正義で自分が悪だということになってしまい、これをくつがえしようがなかったということ。

〔　　〕

(2) エーミールへの謝罪を通じて、「ぼく」はどういうことを理解したか。解答欄に合うように、本文中から二十字以上二十五字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□ということ。

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア エーミールは「ぼく」がチョウを台無しにしたのではないかと疑い、根ほり葉ほり尋ねた。

イ エーミールは「ぼく」がチョウを台無しにしてしまったことを知り、強くののしった。

ウ 「ぼく」から見たエーミールの態度は冷淡なもので、「ぼく」をただただけいべつするものだった。

〔　　〕